

『悠遊』編集者になろう

松浦 俊博

二〇一八年に『悠遊』編集者のS氏から誘われた。最初は断ったが、ほとけ仏のS氏に何度も頼まれたので引き受けた。以来、編集者を五年、その後アドバイザーを二年続けている。「『悠遊』を廃刊にしないために力を貸そう」という高邁な精神を持つ会員は是非手を挙げてください。

まず、「投稿原稿はテンプレートどおりで、そのまま校正作業に入れる」というのは幻想で、二割近い方の原稿はフォーマットやり直しが必要。その結果、ページョーバーする場合は、編集者が文意を変えずに削除して詰める。ワードソフトのないPCで作成すると半ページくらいオーバーする場合もあり、大幅に削除して作者のご了解を得てから校正に取りかかる。手書き投稿がなくなっただけでもありがたい。

最初の校正作業では編集者一人当たり最低三回読む。一回目は文脈のチェック。文章の順序の入れ替えなどが必要な作品もある。二回目は間違ったことが書かれていないかのチェック。一項目ずつ調べて確認する。歴史や時事問題や科学分野では間違いも散見される。三回目は誤字・脱字・括弧と句点の間違いや数字の統一など。これは何度もチェックしないと見落としが残るので、ゲラチェック後も行うことになる。

内容については、編集者は口出ししない。ただ、旅行した場所の名前だけとか、〇〇の演奏会が良かったという記述だけとか、名所や有名な美術館やレストランの名前を挙げるだけの作品もあるが、ガイドブックの転記に思える。自分の経験についての描写や、時事問題などについては自分の考えを述べている作品は面白い。

現在の『悠遊』を形作られたO氏から「編集者は楽しいだろう」と励まされたが、今ではそう思えるようになった。また、他人の作品の校正作業を繰り返すうちに、自分の文章が隙のないものになってきたと感じられ嬉しい。

感心するのは会員の結束力である。十七文字作品専門の方もエッセイを書いてくださる。病気で体を動かすのも不自由な方も参加してくださる。こういう方々が『悠遊』を支えて下さっていることを理解して、できる範囲で編集作業を支えようと思っている。